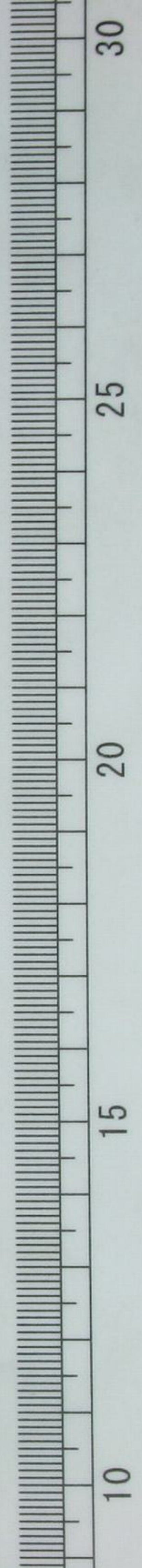


藤田久次郎録
鹿島戦争記
土編



A430
5

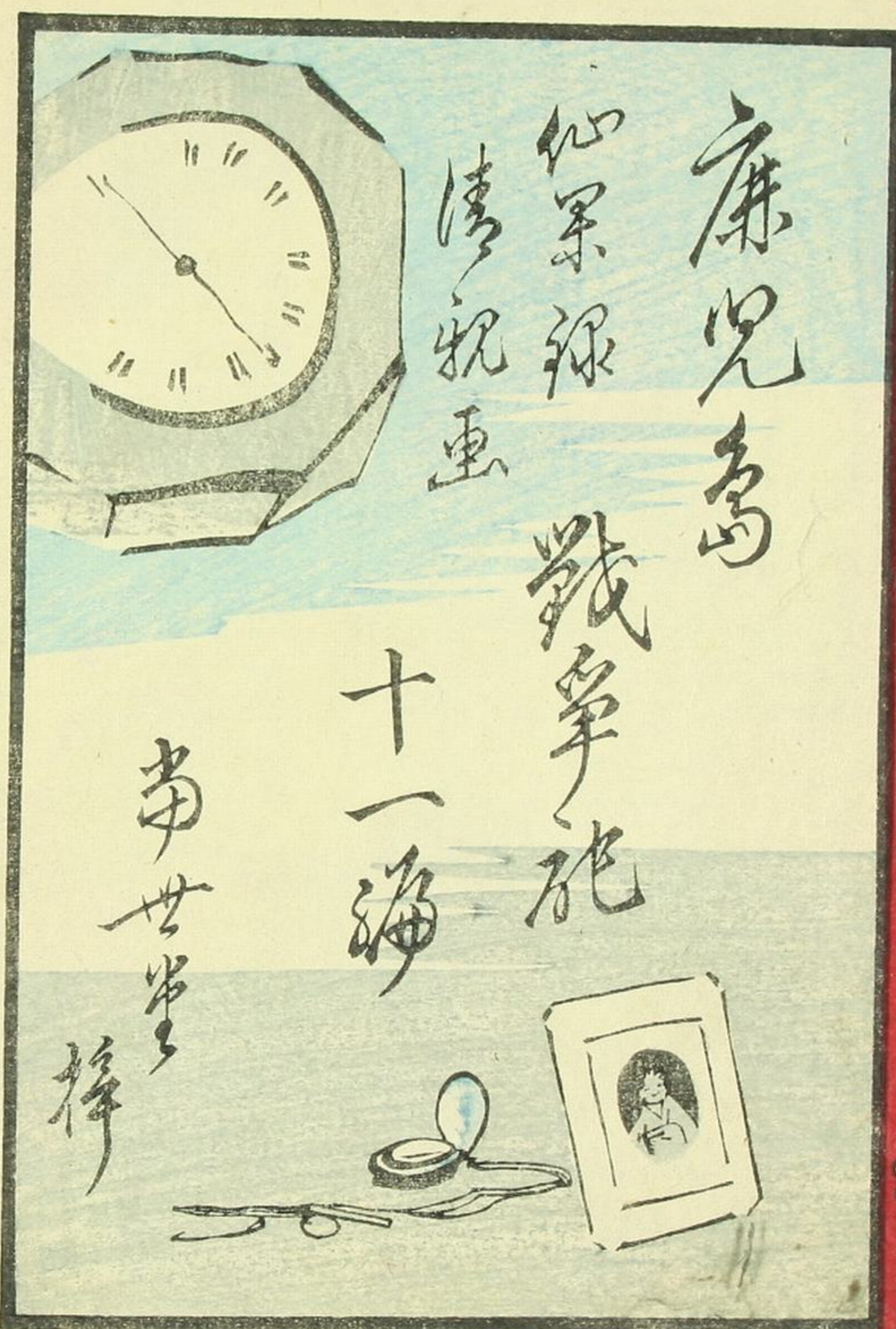
鹿兒島

仙果録
戦争記

清祝画

十一海

南世半
梓



鹿兒島戦争記十一編

東京 篠田仙果記

備もかの暴徒等ハ
鹿兒島小隊とて一軍

を統率すむとてその勢凡そ
三千余人本隊の道傍あり

小山田。伊豆。田上村。武村
とつより小銃組と先んて

次西武湖

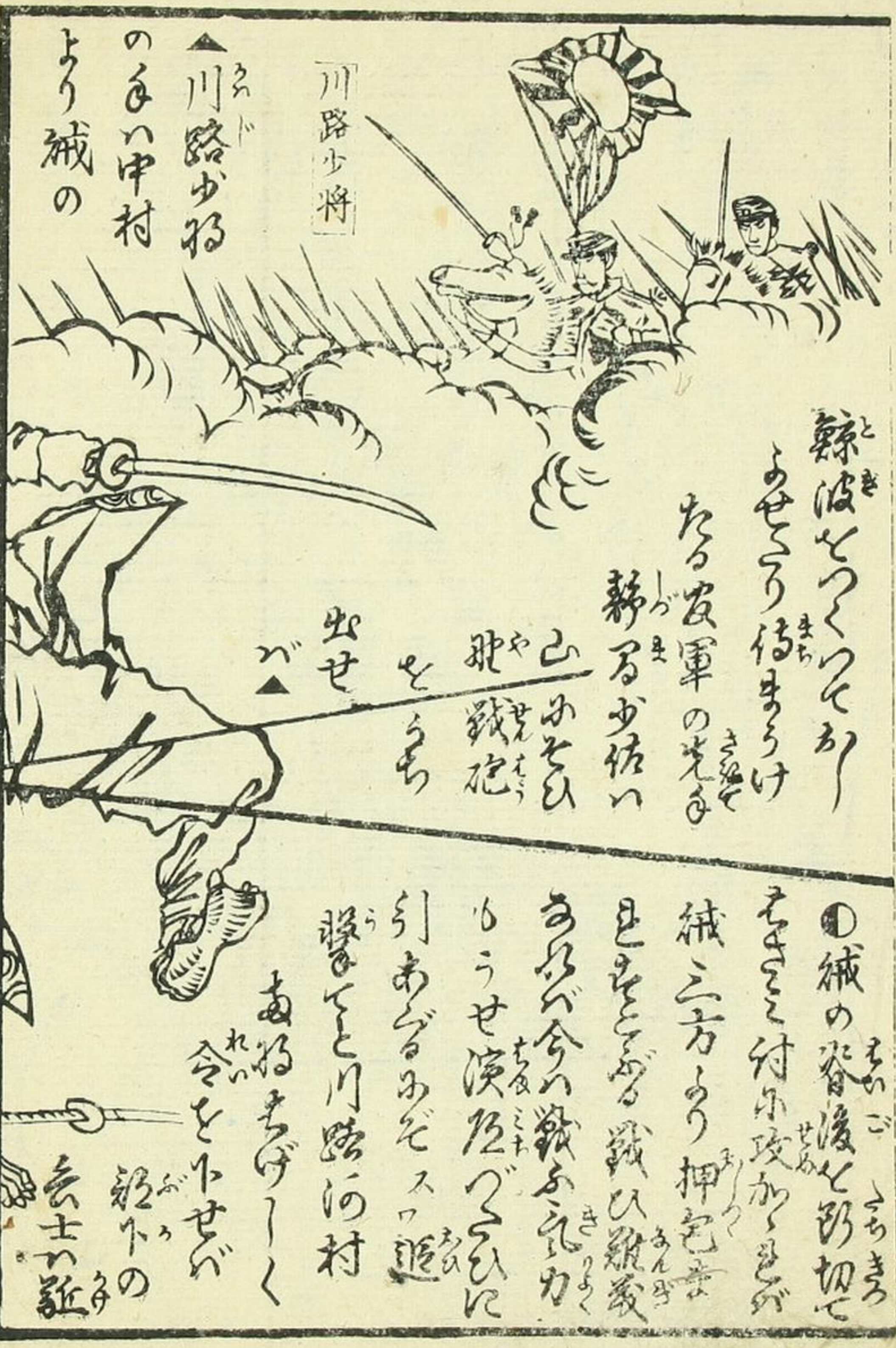
自まんの壯者

氷にひたりぬ
を刀打ちあり

鹿兒島十一



48-7876



▲川路少将
のちの中村
より城の

川路少将

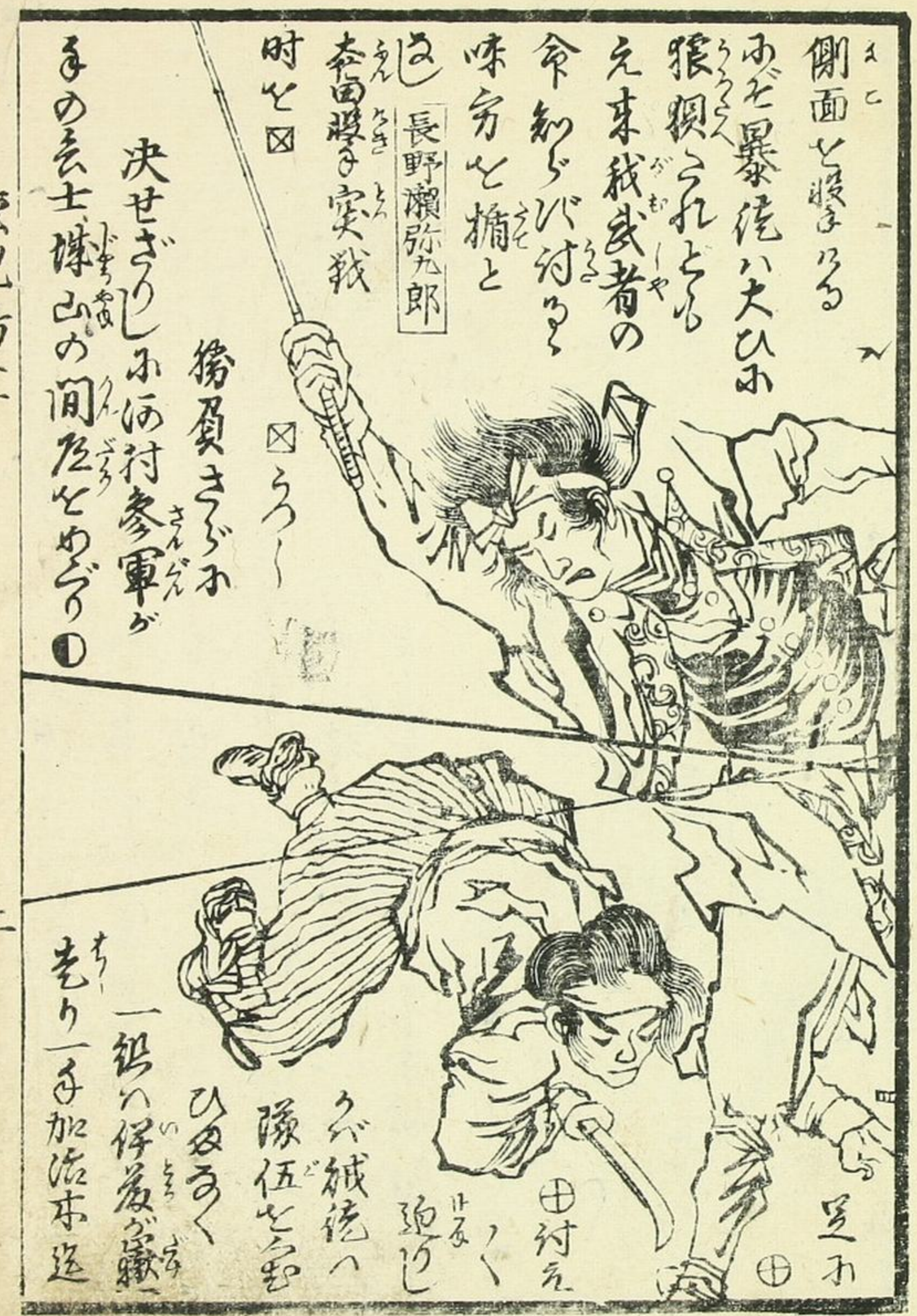
頼波とつくとつて
あせり侍まうけ

たる友軍の光
頼万少佐の

山おとひ
飛鉄砲

出せ
せうあ

●城の脊後と切切て
まきと付小攻かき
城の方より押包ま
はるをさる戦ひ難
あまふ今の戦ふに
もうせ漢及つて
引あがめをスッ
撃と川路河村
あつちまうけ
令と下せ
船下の
去士の



側面と腹まらる
あど暴徒い大いふ
狼狽これと
え来我武者の
命知らび付る
味方と捕と

長野瀬弥九郎

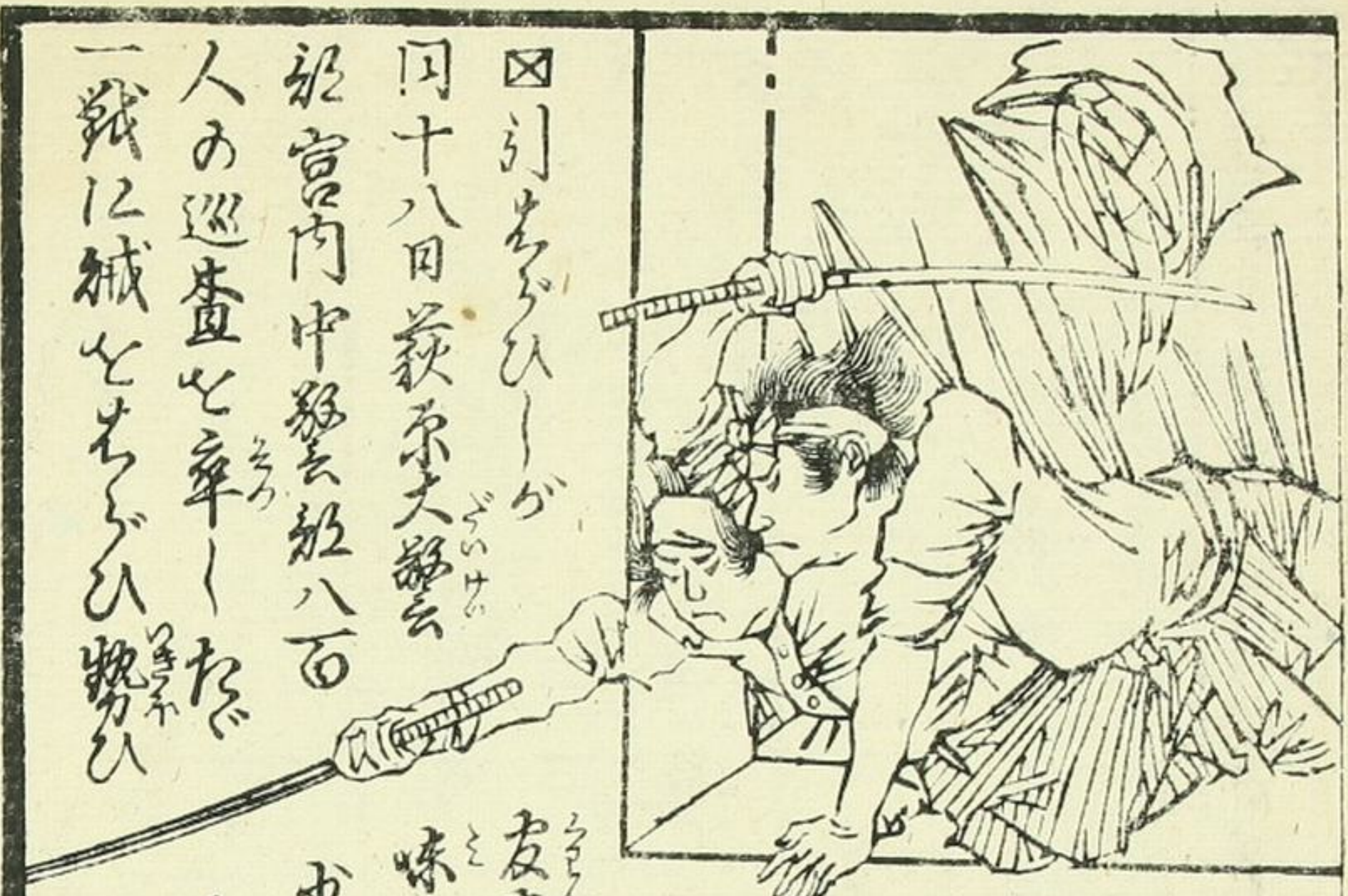
本田源子実戦
時と

勝負まうけ

決せざりし小河村参軍が
子の去士珠山の間にせり

奥日記上

①付え
追ひ
去城徒へ
隊伍を
ひあま
一組の保後が
去り一子加治本迄



引あがりさきへ宿の戦う以りて
 緋の隊長なる長世津弥九郎
 ちがぬ二十六人討死せり

○五月十二日緋焼予人など
 大木様卜一札入し重忠の
 教玄察所へ不意小夜討せ
 仕をくに教玄察
 友更も侍へる旨と
 味方へつりし
 少勢な
 是六一匹の

△引あがりさきへ
 同十八日萩系大勢
 羽宮内中経芸八
 人の巡查せ率くた
 一戦に緋七ちがひ勢

引あがりさきへ宿の戦う以りて
 緋の隊長なる長世津弥九郎
 ちがぬ二十六人討死せり

○五月十二日緋焼予人など
 大木様卜一札入し重忠の
 教玄察所へ不意小夜討せ
 仕をくに教玄察
 友更も侍へる旨と
 味方へつりし
 少勢な
 是六一匹の

△引あがりさきへ
 同十八日萩系大勢
 羽宮内中経芸八
 人の巡查せ率くた
 一戦に緋七ちがひ勢



はるごとくおん山一
 進撃し緋墨
 教々不責抜すり
 ○こころにおん八代口の
 友軍の水技ある
 大宮山を七番戦
 緋七ちがぬ十八人
 烈後攻殺すあり
 あぞ緋焼の跡くりて
 均代る兄原さすり

退ぞ死ける

○萩の四原児湯の縁合

はるごとくおん山一
 進撃し緋墨
 教々不責抜すり
 ○こころにおん八代口の
 友軍の水技ある
 大宮山を七番戦
 緋七ちがぬ十八人
 烈後攻殺すあり
 あぞ緋焼の跡くりて
 均代る兄原さすり

退ぞ死ける

○萩の四原児湯の縁合

大山美之助綱良ハ物仕柳原宗光
公小走らば以林戸港へ着せしめ
うてより入山ハ

病々控盛
と深く伝

大山綱良

暴
事伴
條廊の友金と



○茲小八代足利軍
廿一山中依の座
たる撥按隊ハ二夕

ハ
色
ハ

械におろり

業の運
送まそカー

械に名せ

罪判然とれば

外之の船中より於て右佐藤奪

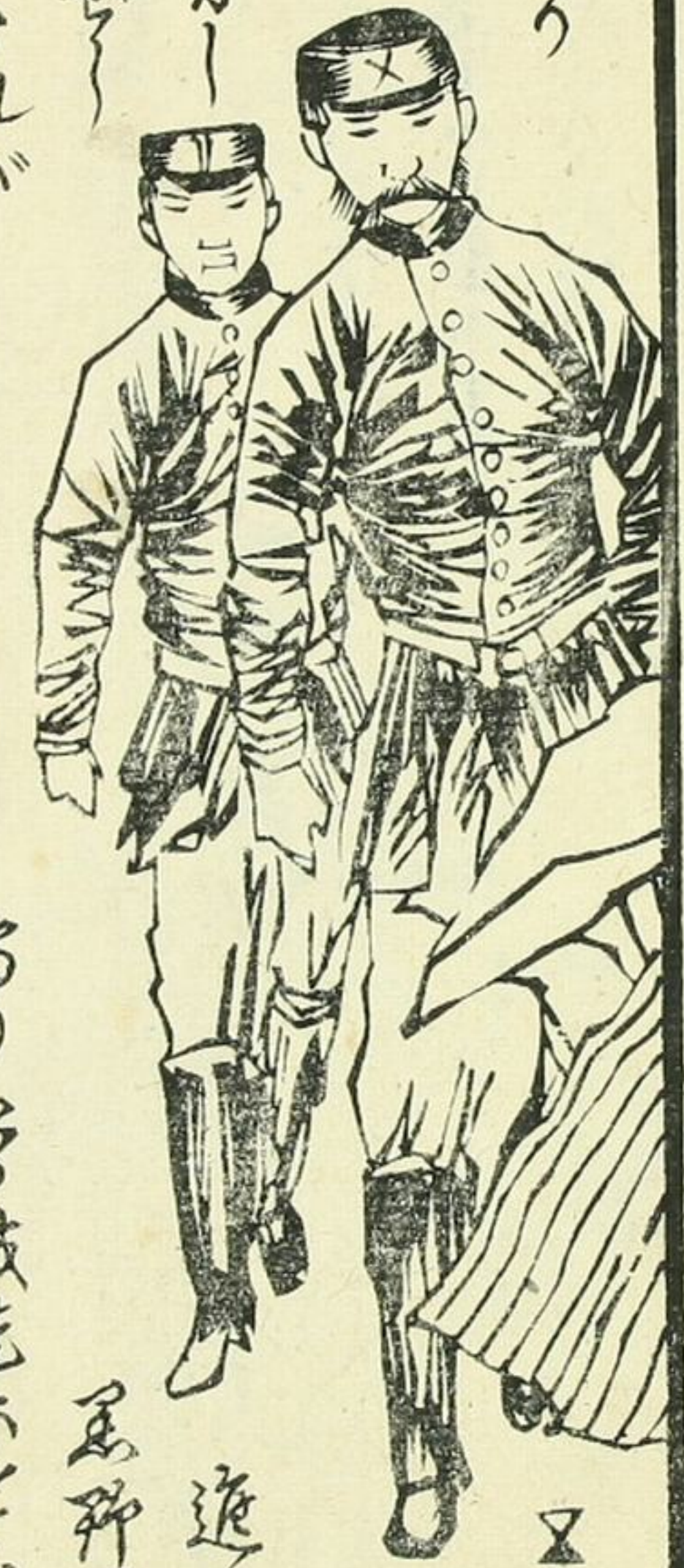
の之捕縛あり或はよ東多之儀

送せしは臨事裁判ありて相へ

大山綱良ハ九妙ある臨事裁判所を

総督有栖川の宮の裁決とせしむる也

とて是は但世再び九妙(獲送)し



ハ
二
山
上

逸んで

尾野田山

攻めけハ一子ハ山の麓を

めぐり山のよある味方と

命一川辺村深江村

とて是は但世再び九妙(獲送)し

入らんとするに



暴徒等

とと彼らと下と天虎
敵門居おれと小銃
とも小連發ありて



○入吉街道

瀬摩山の

戦い

▲敵一々

防ぎたりなきが
友軍容易小銃
がく対陣ありて



一夜をありし翌月

一田秋も来どぬらぬら
月の光りや傳りあをまめくの刺川と共
友軍の進軍あり小津水村の杉林より
緞衣列後砲撃ありに友軍も
是れを頻り砲撃はる放

あつとく勝負のへんえ
ざりる時小津後軍
の一月の八代屋の
瀬摩山といふ所
さうかす左様
せまの九十九折の



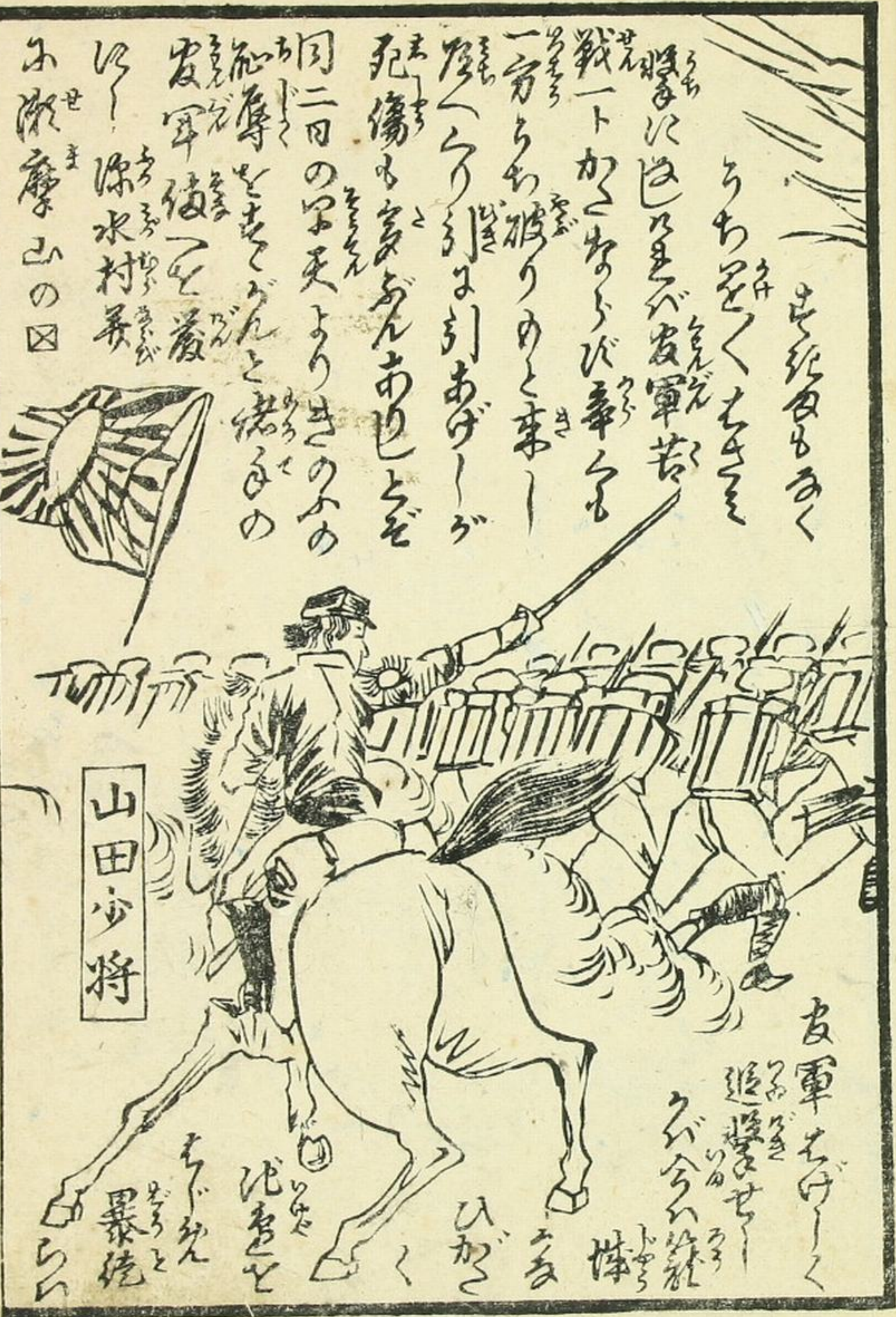
○雑

そのお

杉の林

杉の林

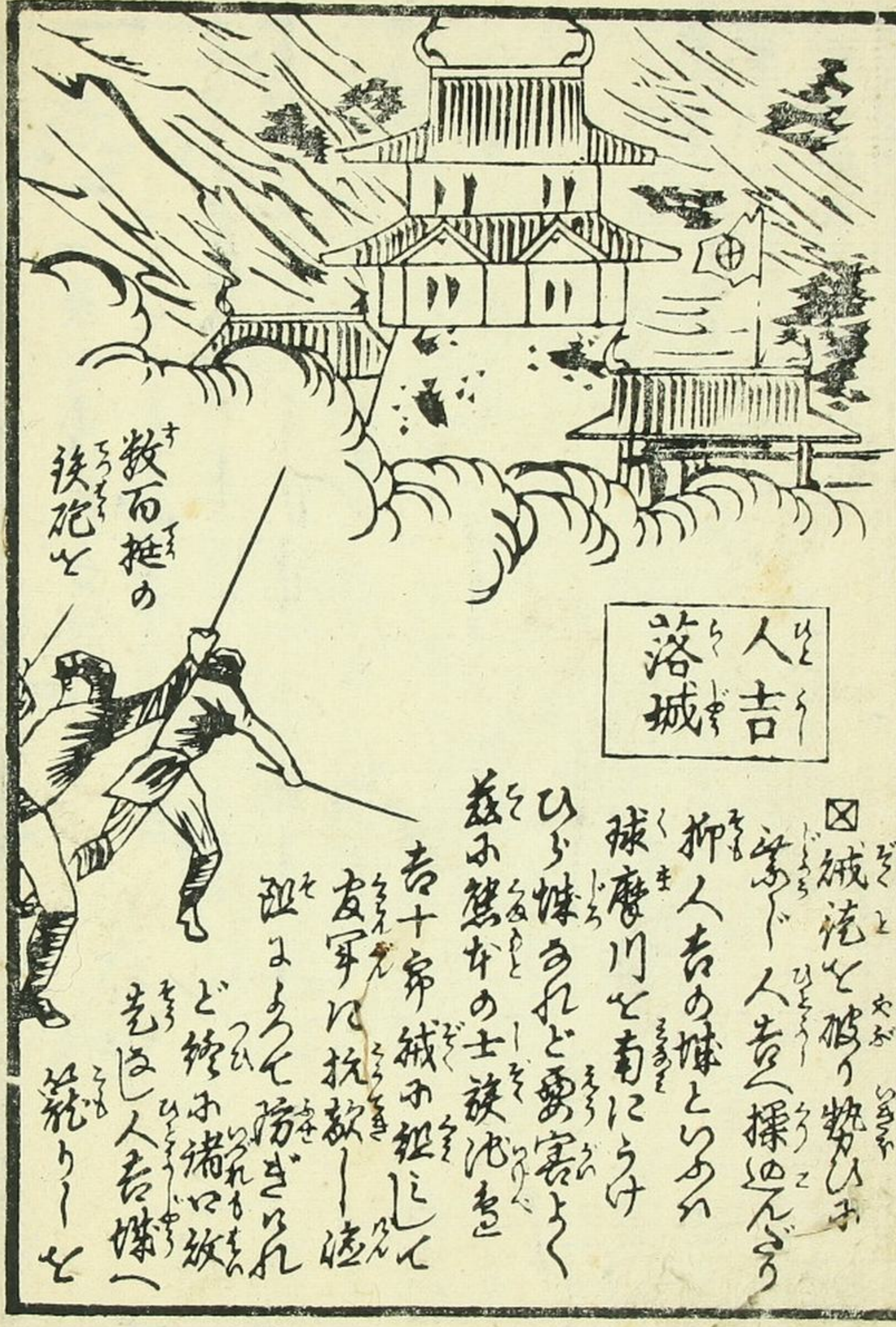
一各小トツト起り



友軍を引く
 戦一ト下カニ
 一カニカニ
 死傷も多
 同日の早
 友軍は
 山田少将

山田少将

友軍を引く
 追撃せし
 兵士の
 山田少将

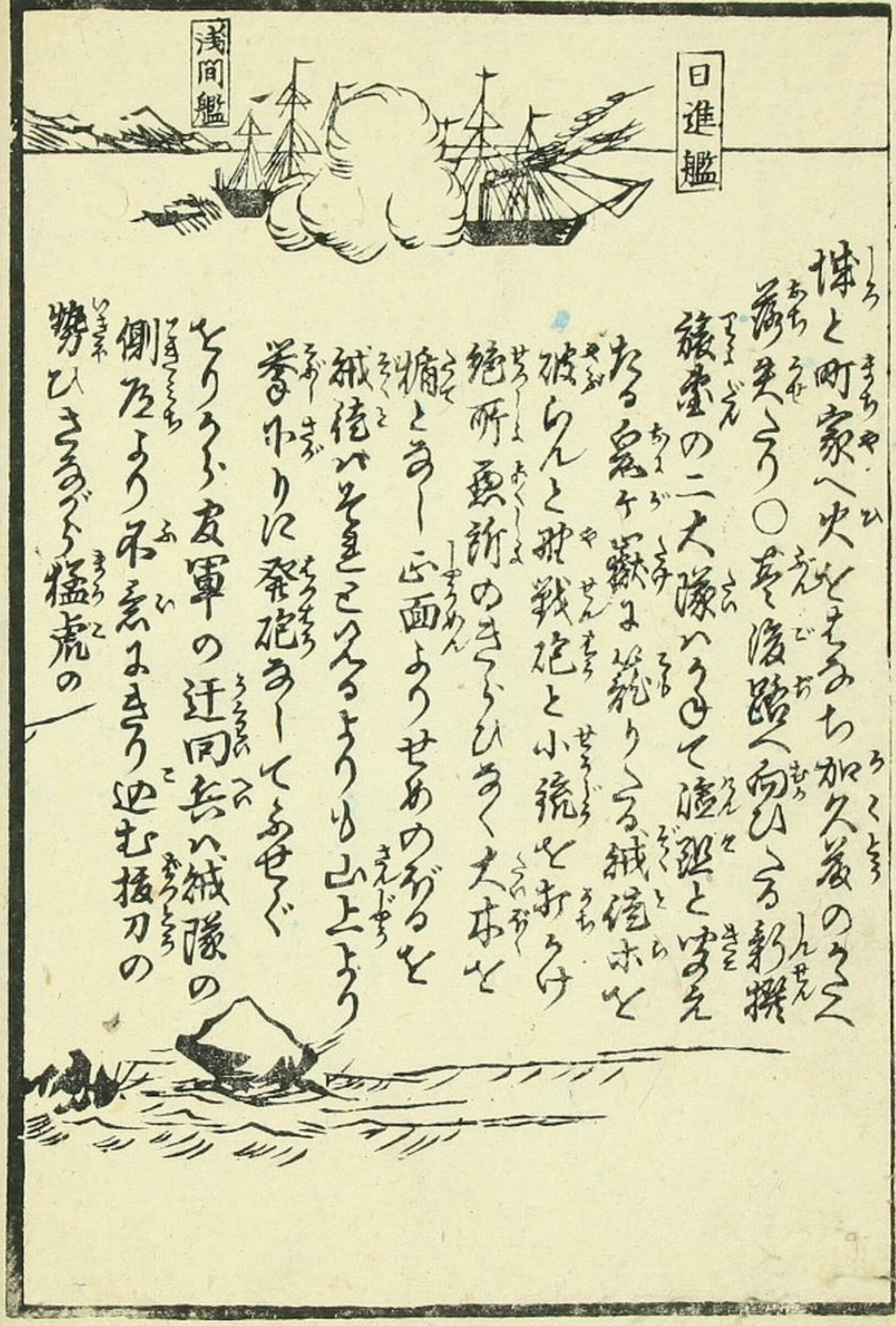


人吉落城

敵砲の
 後砲

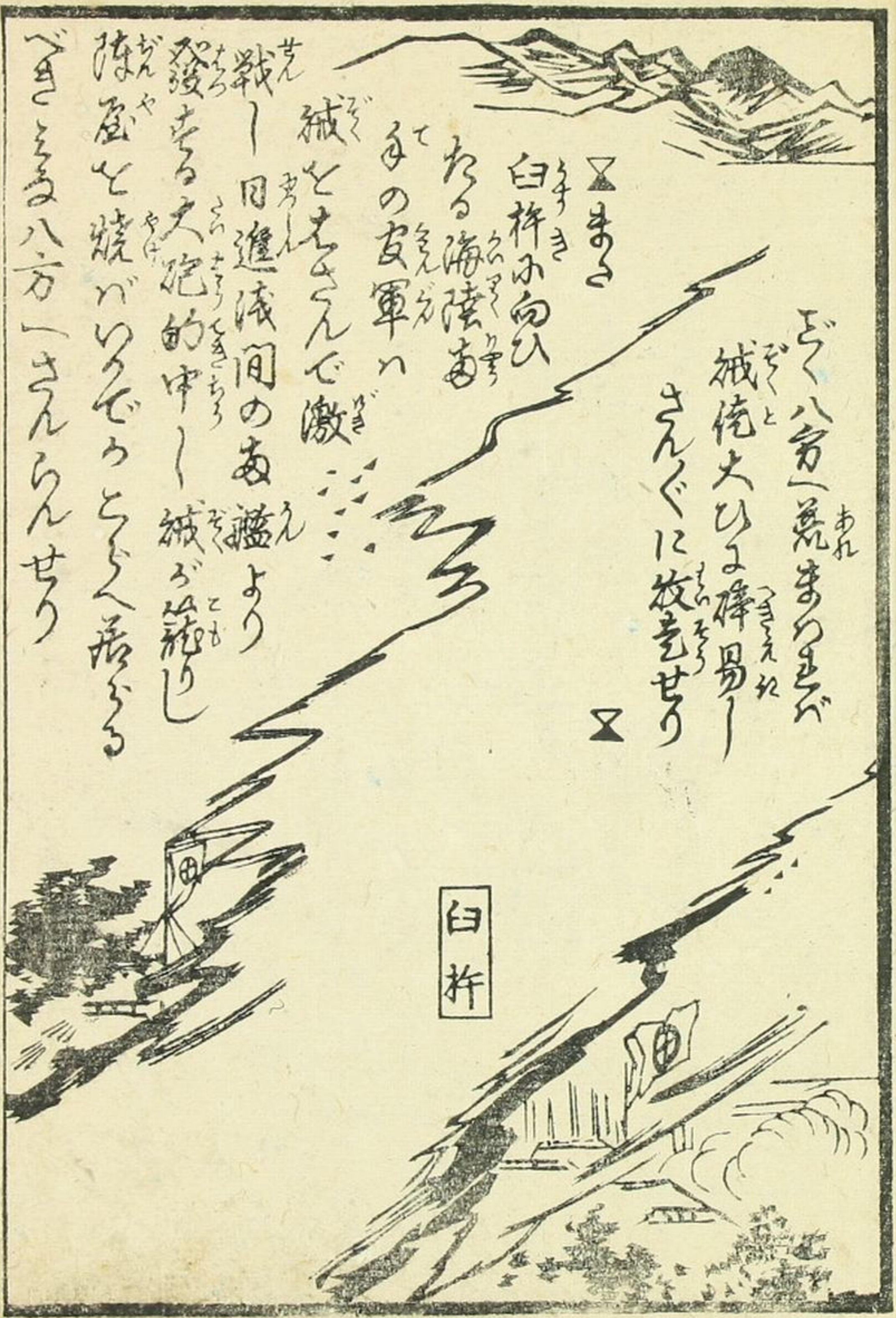
城を破り勢ひ
 抑人吉の城といふ
 球磨川を南にうけ
 ひし味あれど要害よく
 敵小徳本の士旗池を
 赤十字城小徳本
 友軍に抗敵し徳
 退りしと
 人吉城

日進艦



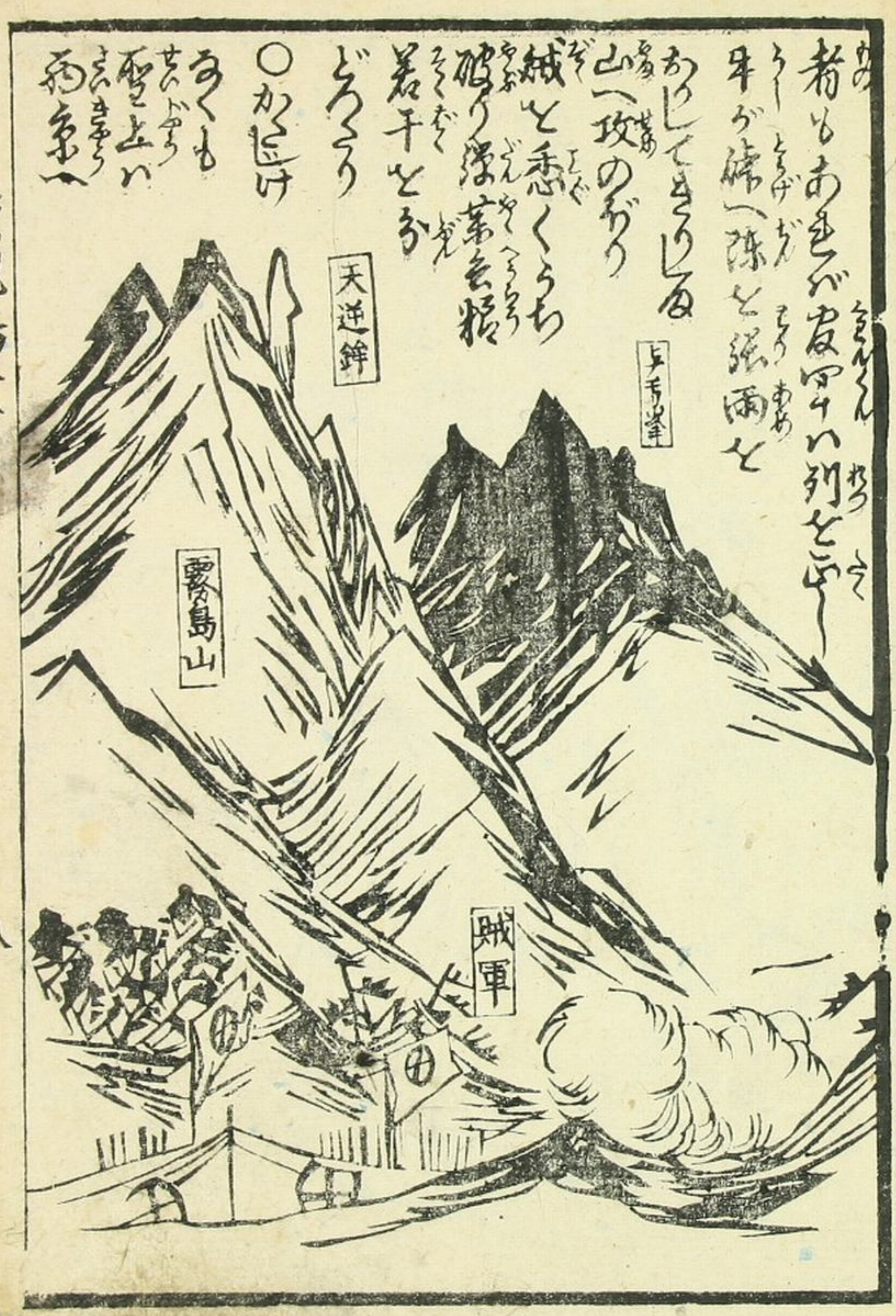
城と町家へ火をもち加久後のうら
 海を渡る○其後踏へ向ひ方新撰
 後軍の二大隊へうて陸軍とつえ
 たる鬼子敵は籠りたる城はホと
 破れんと戦戦砲と小銃をおろけ
 絶所無所のさうひまう大木を
 擁とあり正面よりせめあつるを
 城はハそまことろより山より
 香巾りに砲砲ありてあせむ
 とりうら友軍の迂回兵は城隊の
 側より不意にまう迎む抜刀の
 勢ひさあつて猛虎の

浅間艦

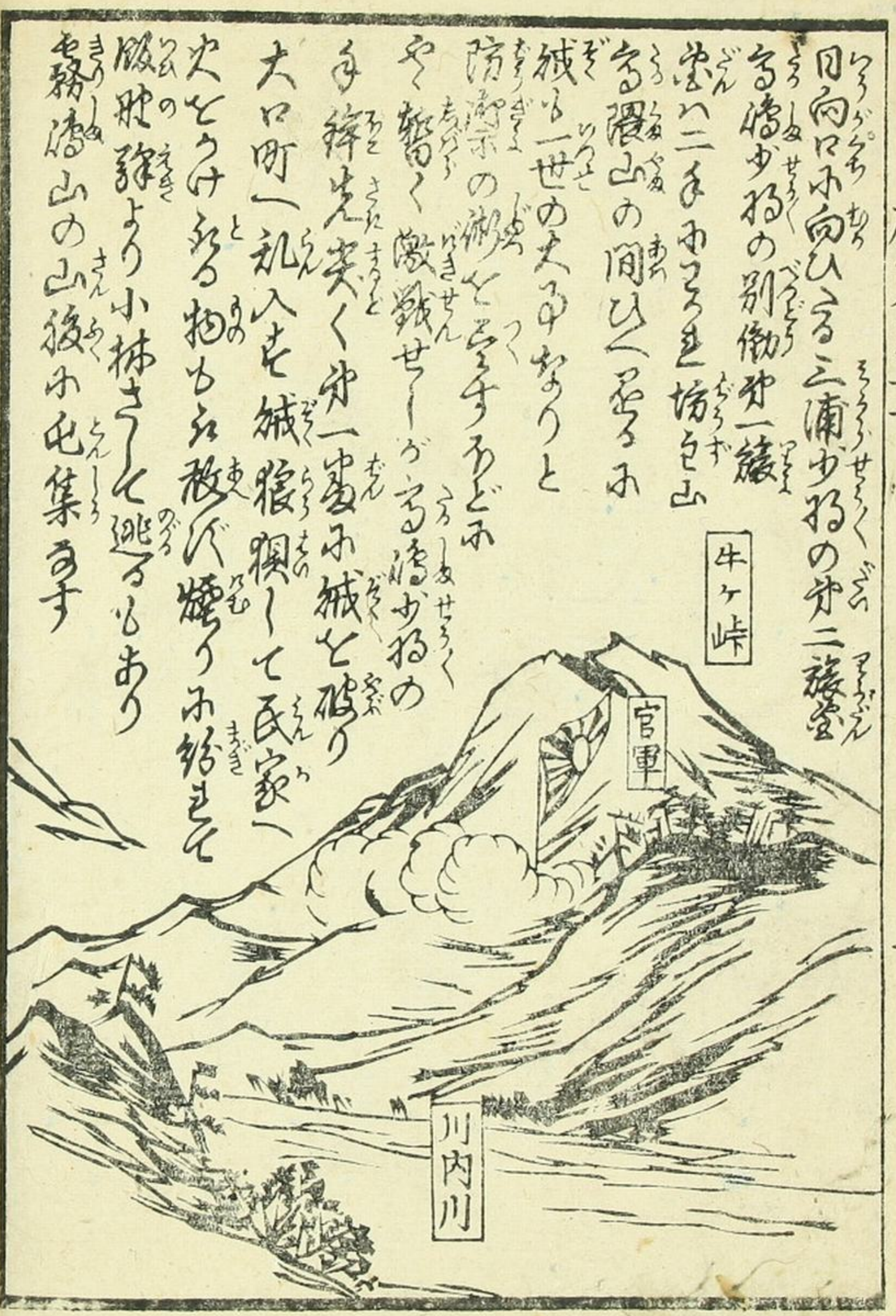


白杵小向ひ
 たる海陸軍
 子の友軍は
 城とをえんで激
 戦し日進浅間のあ艦より
 發する大砲的申し城が籠り
 陣を焼びつてうらうら
 ぶきまは八方一さんらんせり

白杵



霧島山
 天逆峰
 山一攻のかり
 賊と悉くあら
 破り深業を振
 着干と分
 とうり
 ○かじけ
 あくも
 野系



川内川
 官軍
 牛ヶ峠
 大い所一礼入を城後観して民家一
 火せうけする物もな敵は焼くお給まを
 賊軍より小林さうと逃るもあり
 毛務山の山後小化集ます
 防衛の湖とるすうあどふ
 や暫く激戦せしが官軍少の
 手降先突く舟一處小城と破り
 城も一世のたふちありと
 赤い二手あつる坊色山
 霧島山の間に居る小

原田

原田

此の敵軍ありせむは誠征伐の實況をききしる
 友軍曰く勝利とのみならずは征討総督有栖川の文
 山線多軍河村海軍
 中務少将少将
 三浦少将少将
 余は初校はじめ
 佐士に及ぶるまで
 軍勢の内懸問
 とくく 總督有栖川宮
 東久世侍従長と
 戦北つらさき一統へ
 初告あり以河村等と



佐土系の
 近信小牧

あつり
 乃まバ何と
 東久世侍従長
 もありごく頂戴し一層勇気
 目下は増し指足とすくもなる
 ○さても誠征の本營
 と日向の文清小舟
 次第
 遺和と佐土系
 今將の機木に
 まうけ誠招新納
 十花巻と
 菱糖し

河村中將

川路少將



村あて報
 きらび小舟
 紙幣
 と



又小軍率團係は山子入て物
 あると相形利秋逸見十郎を以
 百中七後商桐野利秋
 絨羽を色々色を在り
 油出し宋妻を
 教は後松と集
 め頑固士族を煽
 動するは友
 軍は皆へくか
 さふが勢攻は致す
 べと逸見十郎太

鹿兒島戦争記十一編了

▲決招校招

後ありて
 日向海
 小段は
 あり

明治十年十月十日出版御届

編輯人 篠田久次郎

第五大區七小区
 下谷上野町
 十二番地

出版人 杉浦朝次郎

第五大區一小區
 浅草茅町二丁目
 十六番地

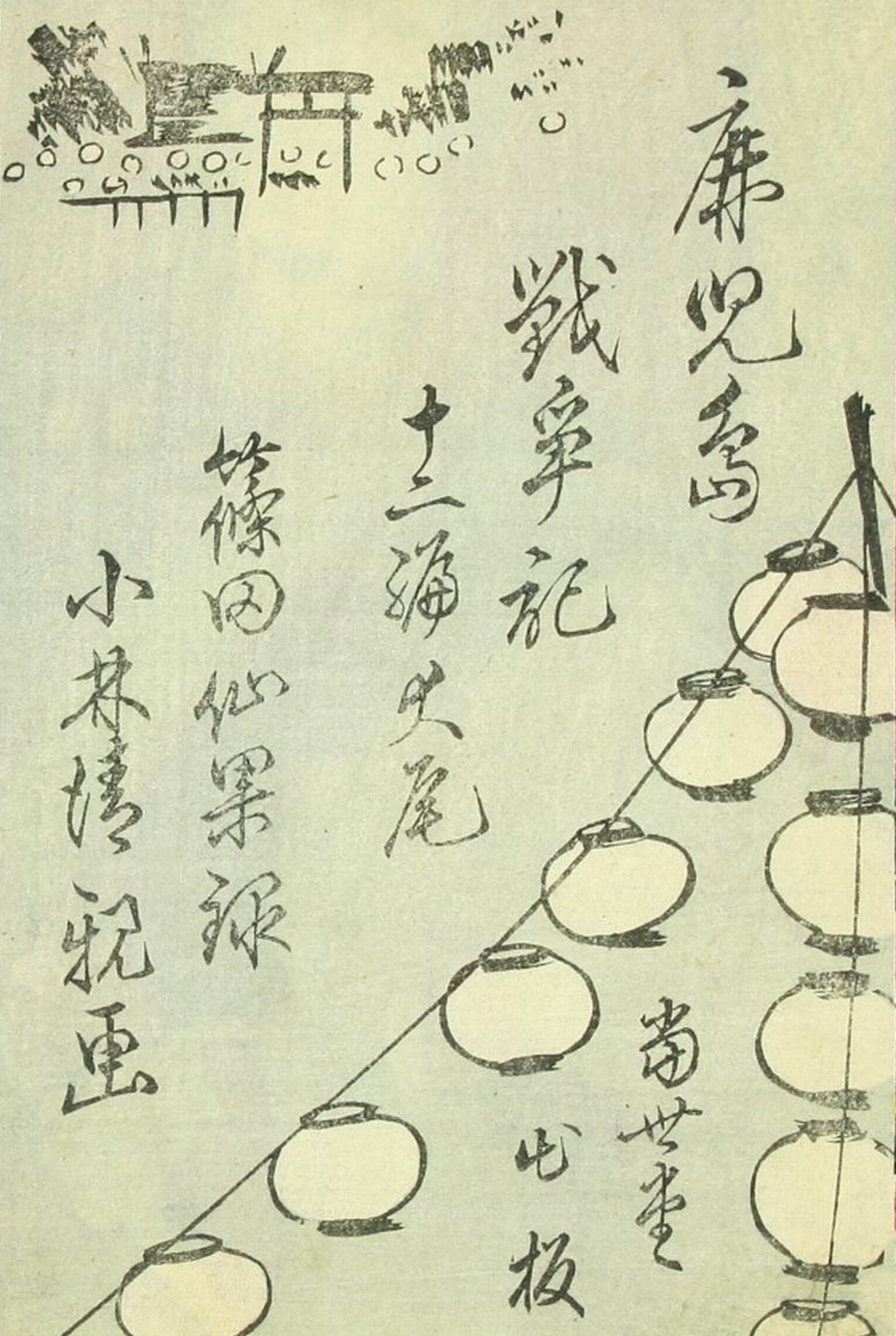
藤田久次郎録
鹿兒島戦争記 十三編 大尾



大友朔太郎



幕見島
 戦争記
 三浦貞尾
 篠田仙果録
 小林清就画
 尚世堂
 七板



Detailed description: The top left shows a simple line drawing of a building with a gabled roof. A diagonal line runs from the top left towards the bottom right, with a series of circular pots hanging from it. The text is arranged vertically, reading from right to left.

鹿兒島戦争記十二編 東京 篠田仙果編輯

三浦少将

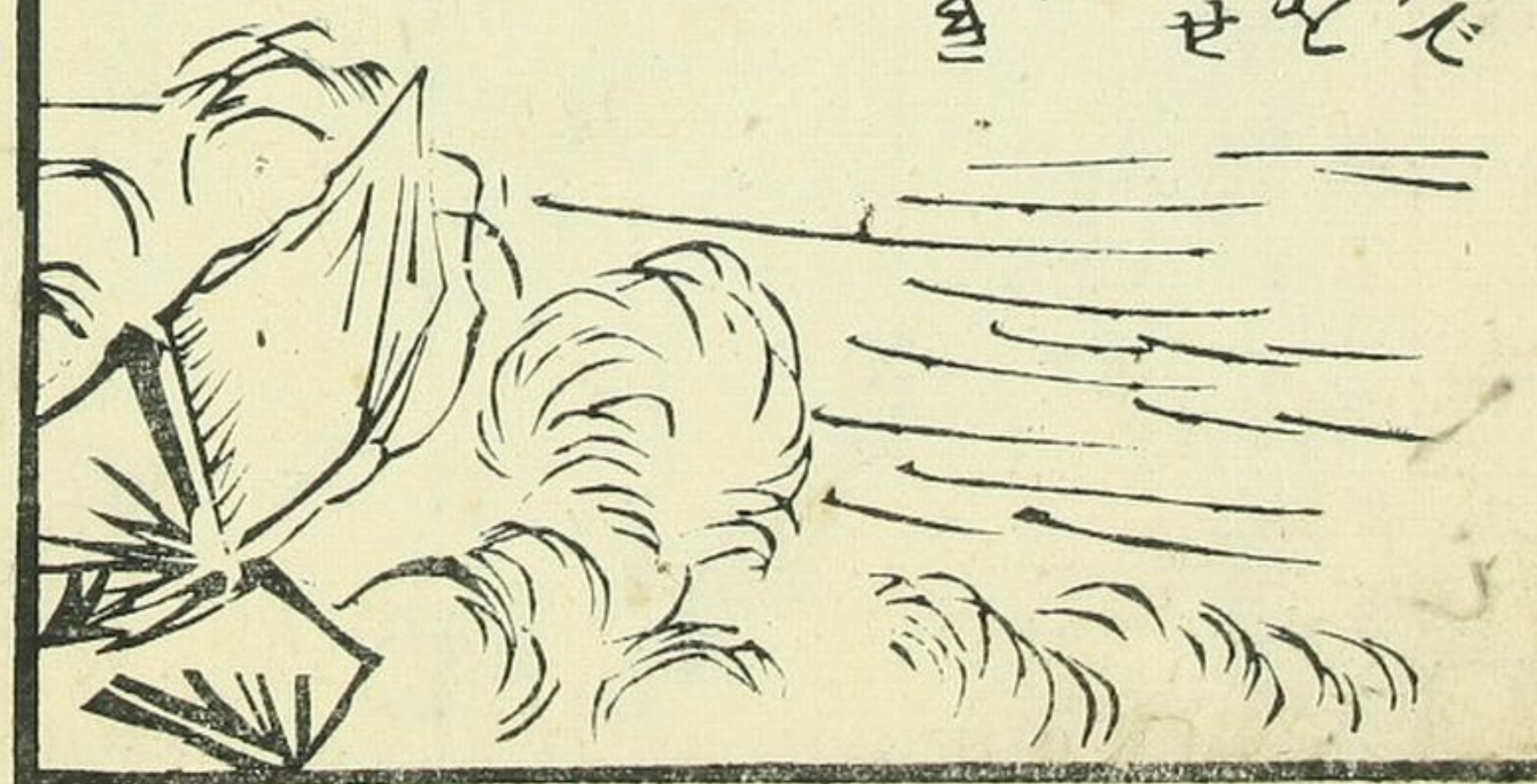


再々
 篠田仙果
 戦記
 三浦陸軍
 戦場を
 往来也
 小浜相模
 秋の
 戦場
 を
 往来
 也

官賊の両軍宮崎の綾川とて

側面を不意に襲ひかゝりて城を
返さんと欲せしむるを桐野の
由りあらば四面より三浦の
川をとり城を包みこむ

の城の中より桐野の
あや川のとの隙を襲ひて
つらきやと不意に襲ひかゝりて
城を指し防衛の隙を
つらきやと不意に襲ひかゝりて

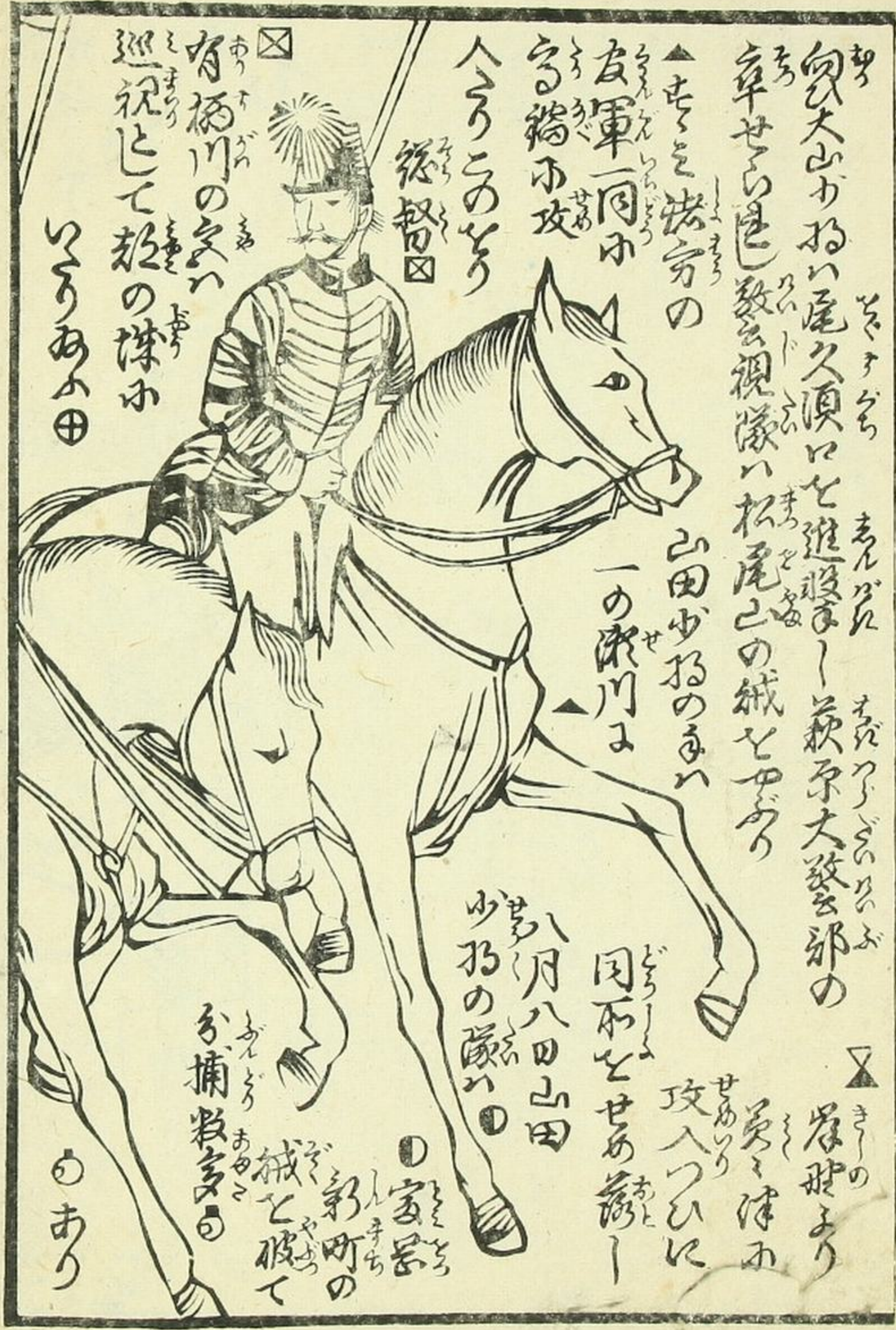


桐野利秋

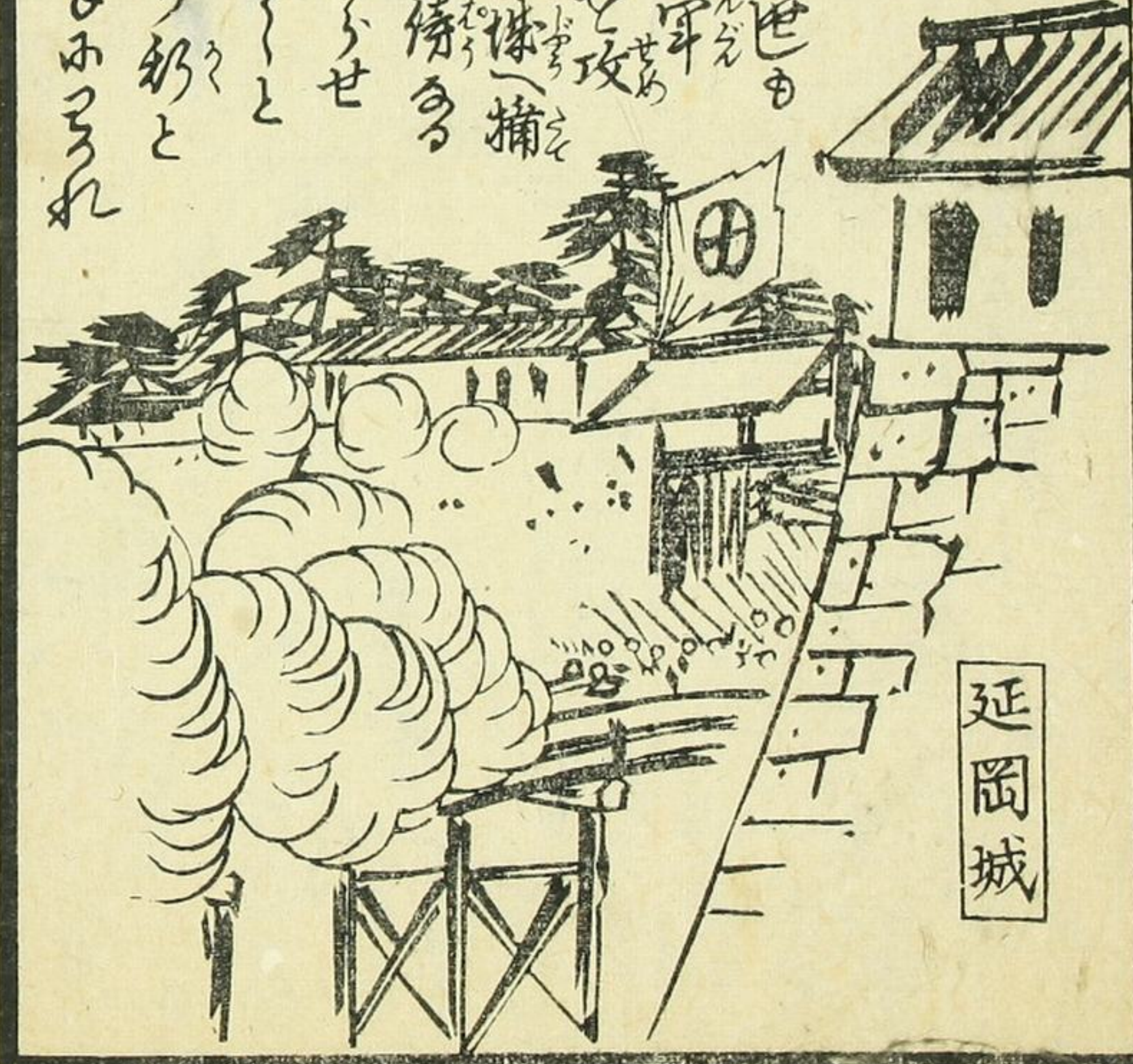
尾撃の功
西宮
傍りて
も防ぎ難
く城の是まで
本營とせし
支那のらちの
を糧ホと
打拵とす

三浦隊の依る

三浦隊の依る

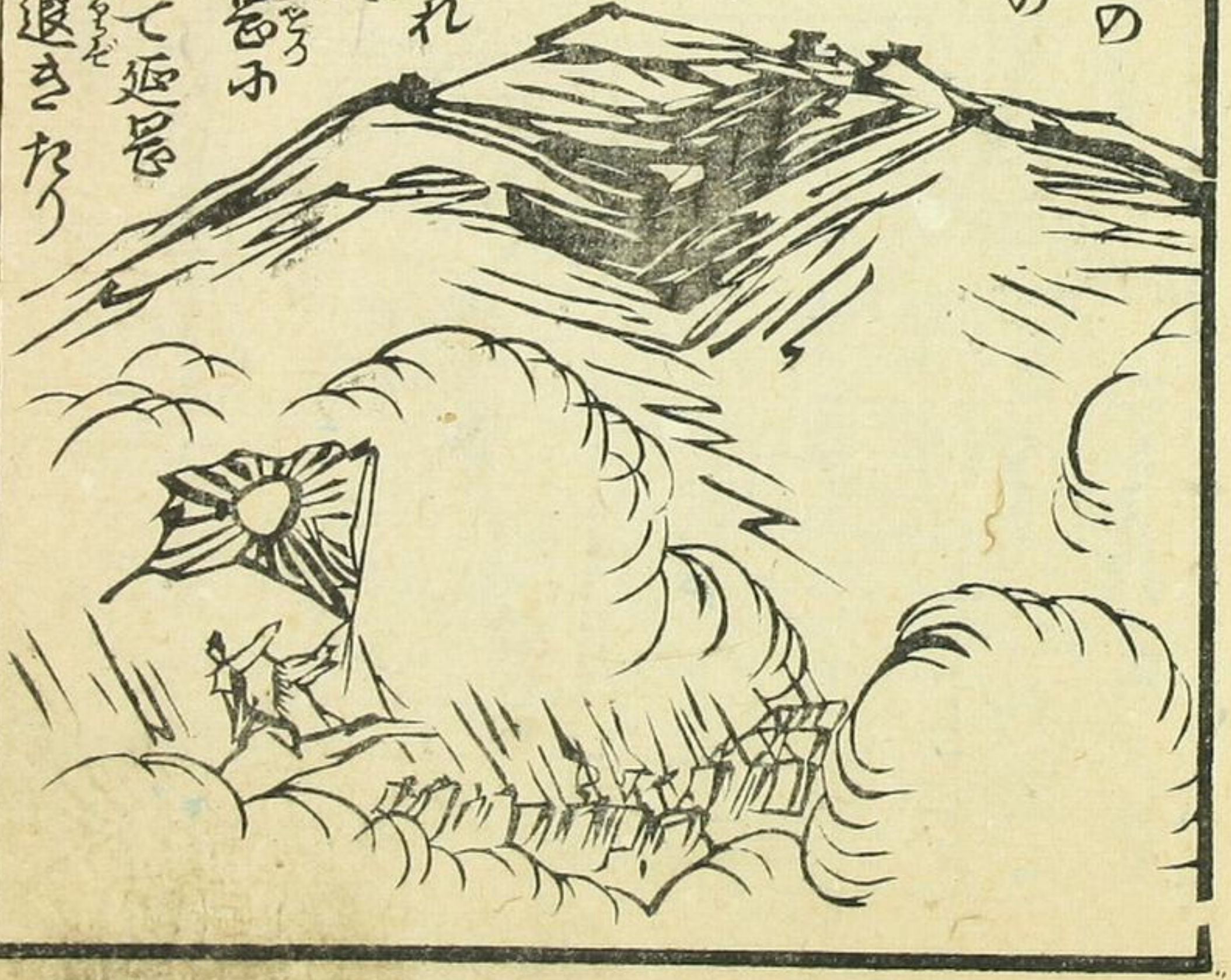


宮崎守備兵と
佐々木元綱が
城を奪く拍子又
墨坊と築江防軍
その甲斐も徳川の
勢ひつゝ遂に各所
を攻めしむるに
このり暴徒とて
熊田を麻村一隊
此所にて合とめ
徳へと固めては
守り各格闘に二

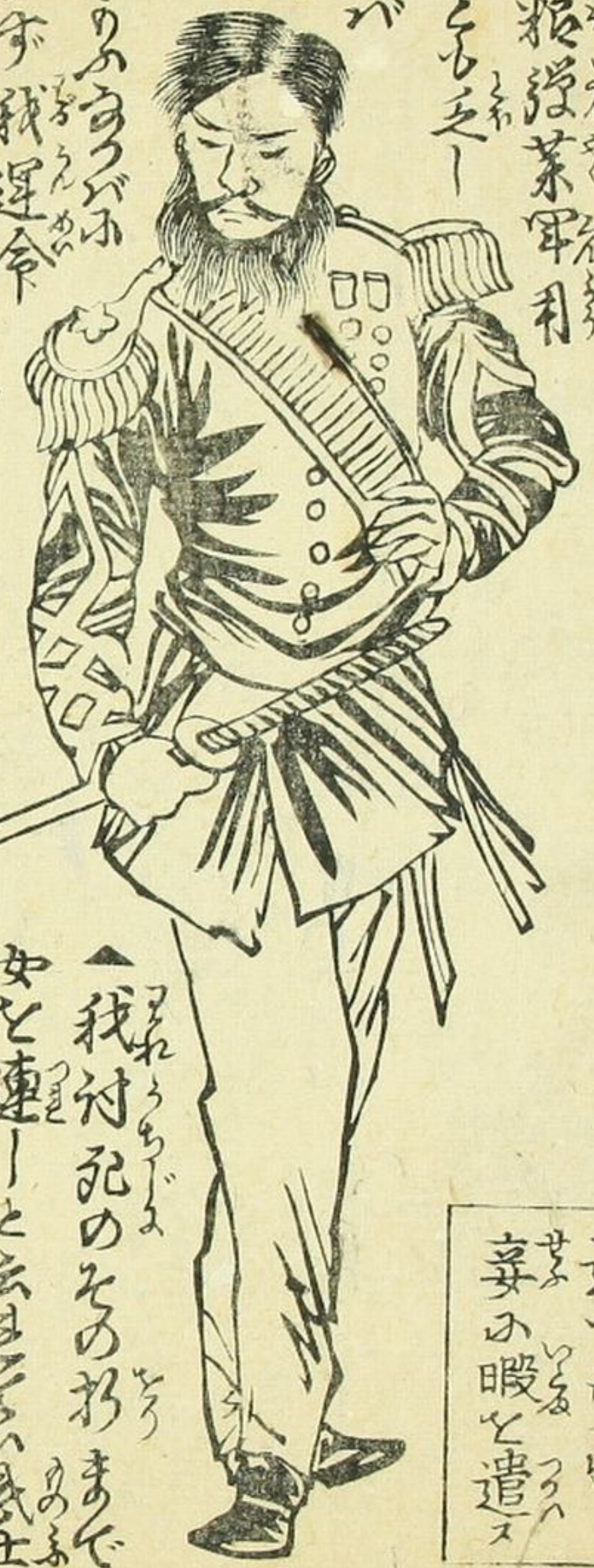


延岡城

攻めしむるに
熊田を麻村一隊
二百人余とて
利ひを以て
不意に切入り
分り合とつて
はこれと定揚
て若戦小
すしが羽
進も逃る
城と落せし
城を八
退きたり



初も雨の陰盛の味方破りのとあふびは條系玉軒
 正めとて投擧と相じ人も多く戦死し上小
 去糧後茶軍利
 金とも乏し
 されば
 ぬん
 小おりのあつた
 至らず我運命
 心是迄ありと覚悟の及びは因迄
 百つと妻お花お若千の金とあ
 衆の喉をつらひるぞお花の今さふ



我討死のそのおまへ
 女と連しと云ふは武士
 の一分多は末練りのめ
 と此りつてお花を
 ひそかに病しる

西郷戦死の不
 遠と覚悟し
 妻小暇と遣ふ

別と成るはし何処迄も
 お供してはうたうべし
 小かわもせげ彼世で
 君を待たるゝと袖小
 衣がり泣入るおを不夜の若
 とおあひかふあつて
 叶わんとつとを何と
 あらび
 七



徳川西の隨從兵同種利秋
 村田新八其余の隊長とあり
 一同小舟に乗りて西郷隆盛の
 ありく多くを敵と引合ふにふた
 敵の慮せらるるに一方を打ち
 及練るに於て再興をせらるる
 いと多しければ何れも同意
 ありと示付りては其の内に
 擧ぐ出で八月十八日新橋
 屋敷にありて西郷隆盛と
 別府新助逸見十兵衛を
 岩崎彌太郎とありて暴徒を
 指揮し



暴徒本
 江之嶽
 官軍の
 本營
 小切

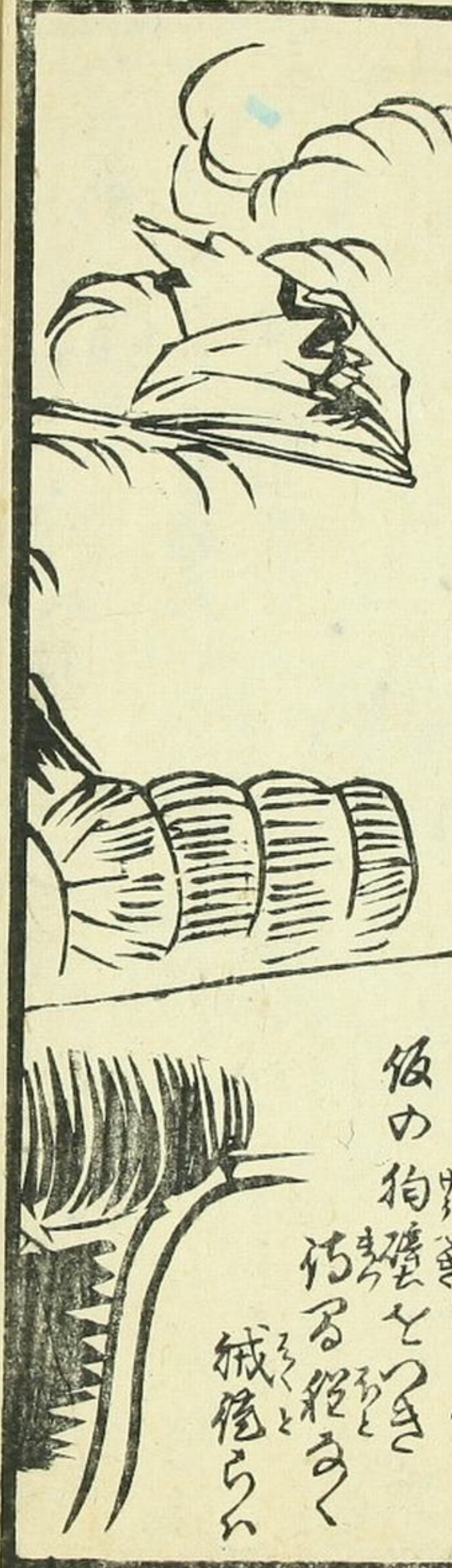


村田新八

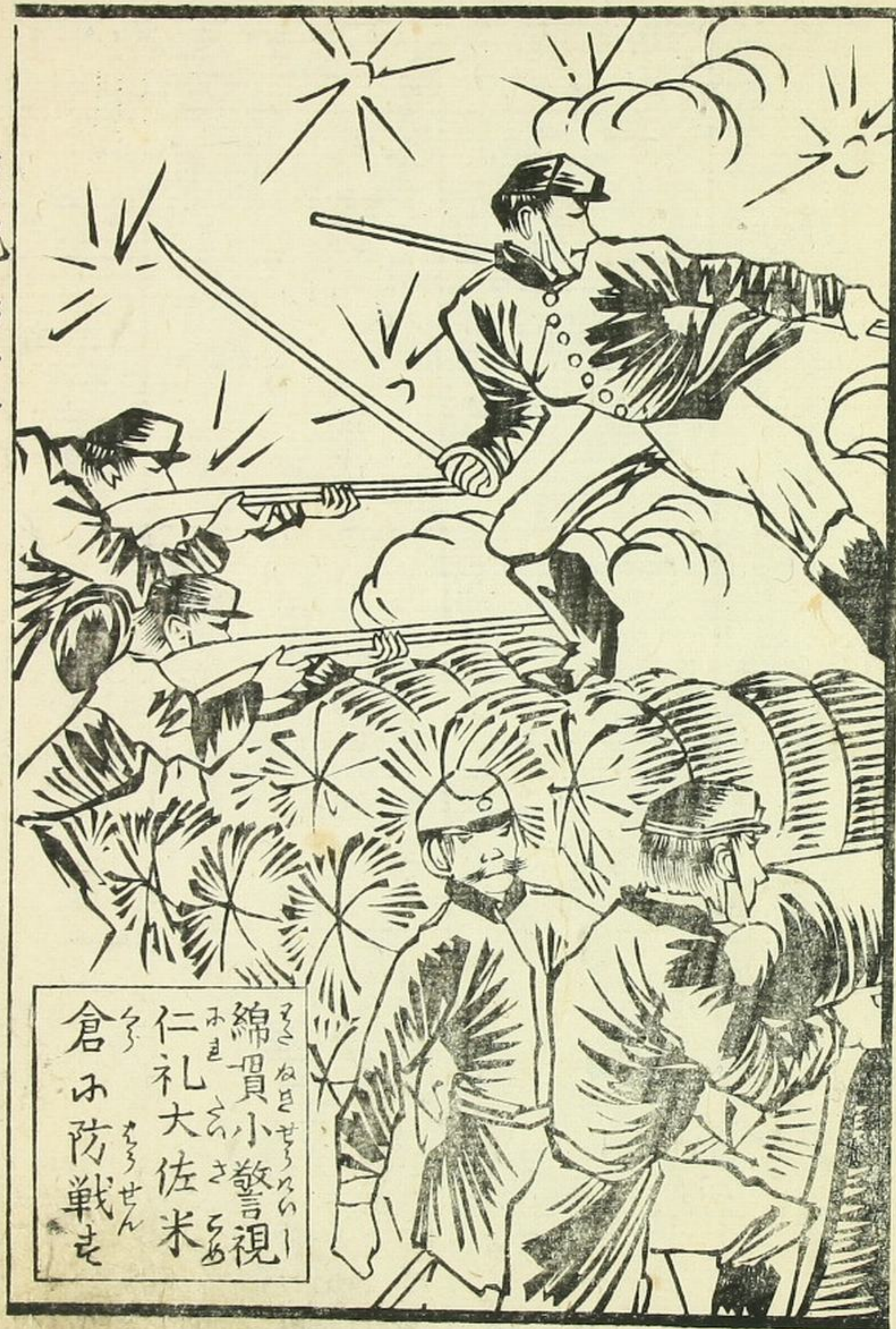
西郷隆盛
 西郷隆盛

西郷隆盛

不意ホドツと切れたる友を防戦するとのどろ窮氣入りて
 猫を喰む勢にたあがり極大のどろ難多く一方打あがり才一掃空
 の掃揚る物子川の極も破の懐石より三田井小うわ入友合
 五子山を地米穀と擽奪し米良酒米を授て九月一日麻見
 海津下一丸入せり○茲小岩村麻見海津令は頼知てつとよの
 まく属友と共小友金虫相未とまともなる子縁丸小宗こそ長崎へ
 還るに巡査隊ハ海軍と一まにるる米ぶらしてらり米俵と取て



飯の狗壁をつき
 巧る程多く
 械倦らぬ



綿貫小警視
 仁礼大佐米
 倉小防戦也

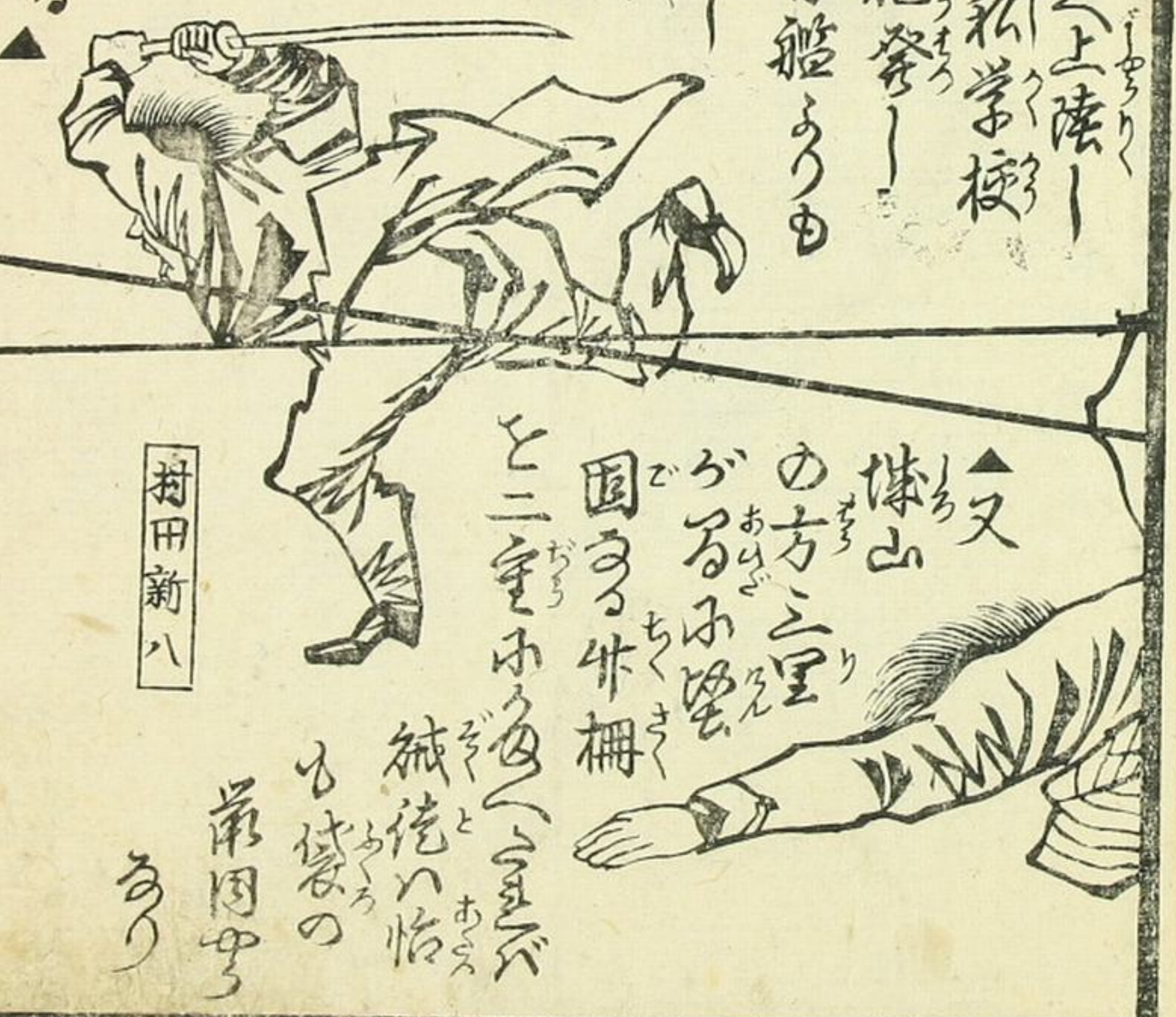
えより案内知つては、練庭と名宛
ちかひ米倉と攻ぬんとまげ〜
奮戦 桐野利秋



あまよきこれと
あま死屈
まら笑ひ
あつりけり
○河村参
軍、大山少将系
河村一旅、密に
吉村少佐の一と共ふ

九月廿四日
官軍大挙
一々城山を
攻撃す

軍艦小糸と、麻見港へ上陸し
暴徒亦が、城山及び、四和堂校
二の丸小とあり、つるを砲撃し
本日艦丁、艦孟春艦より由
烈安大砲を連発せし
久暴徒の大ひ小園御
一城山の谷、洞崖



又
城山
の方之里
が、る小堂
園、牛柵
と二重小、海へ、まげ
絨毯、ハ、怡
小、袋、の
第、四、中
あり

村田新八

樹木昭治

別府新助

十年

九月廿

四日亥

一岡小坂山の

八方より攻め入り

大小砲を連発

一城山あり

然墨を掻きとり

岩崎谷をせめり

中より薩軍あり

東伏見文へ新撰

西郷隆盛



逸見十郎太

籠城を指揮する所ぞ

城の狼狽大うらやまび西

薩軍も谷をのびて

まてとむるより安村中伏見

まてとむるより安村中伏見

安村を打ちえんと互ひ

幸ふに打ちえんと互ひ

西の腰をうりこれヒストル

援けの区があつたとき

岩崎谷の首を打ちひそ

み去中よかきなり



賊將委く
岩崎谷よ
滅凶す





明治十年十月十日出版御届

編輯人 竹條田久次郎

第五大區七小区

下谷上野町

十二番地

出版人 杉浦朝次郎

第五大區一小区

浅草茅町二丁目

十六番地

010190510340

卷之三

九

田賦入

稅

冊

田賦入

稅

冊

田賦入稅冊